

## 『柳橋新誌二編』 訳

佐藤 明

## 【はじめに】

本稿は、成島柳北著『柳橋新誌二編』の現代語訳である。昨年本紀要に執筆した「『柳橋新誌初編』訳」の続編に当たるものである。体裁その他は前稿と同様である。またテキストも前稿で使用したテキストと同じく明治七（一八七四）年に山城屋から出された版を用いた（このときは二編を出版するに当たって、既に出された初編を付して出版された）。二編は初編より十五年ほど後に書かれたものである。明治維新の政変があり、その後の柳橋が描かれているわけであるが、二編には昔の柳橋を懐古する気持ちが自ずと表れている。幕府の旧臣として、あるいは江戸で生まれ育ったものとして、古き好き江戸（情緒）を慕う気持ちはひとしおである。また江戸の文化を破壊しようとしている薩長の武士達に對しての揶揄の気持ちを込めて描かれている話が見られるが、そこにユーモアリストとしての彼の本領が発揮されているように思う。

『柳橋新誌』について述べたいことは多くあるが、残念ながら今回は紙面の都合もあり訳出のみにとどめ、詳しくは別の機会に改めて論じたいと考える。

## 【柳橋新誌題詞】

灯火と妓楼とが、夜の水面に映っている。

竹の簾の奥深くには、艶やかな美女がどのくらいいるのであろうか。一年の中で、春の三月ほど素晴らしい季節はない。歩けば十歩ごとに美女に出会うが、彼女らは柳橋での名声を競っているのである。

柳北の名声は、今の白居易と言ってもいいほどである。

柳橋の美人の色や芸は、（唐の名妓である）紅綃を凌いでいる。

（『板橋雜記』での）秦淮の情事や、揚州での杜牧の浮き名は、

この第二編においても、幾つか記されていることであろう。

竹枝詞を唄う声が、水辺の妓楼から聞こえてくる。

春は艶やかなさざなみに乗って、青いこの湾を洗っている。

柳の枝を編んでみれば、鶯の羽の色となる。

家々のいらかが雲のように重なりあつて、まるで鯉の鱗のようである。

『板橋雜記』の中には、赤衣着物を着た美女のことが多く記され、

『画舫録』の中には、緑の鬘をした多くの名妓達のこと記されている。

私もまたこの日の射す窓辺で艶やかな書物をしたため、

赤い軸の筆でもって、美人の眉を描き写そうと思うのである。

菊池三溪、草稿。

関雪江、書す。

## 序

私は、何有仙史（成島柳北）と柳橋の巴楼で一杯飲んで別れた。指を折って数えてみるとあれからもう三年の月日が経ってしまった。最近、仙史は、その著した『柳橋新誌二編』を送って、「私は今では、無用の人である。そこで無用の書を著して、自らの楽しみとしていのである。

そもそもあなたも無用の言葉を楽しむ人だから、どうか私のために一言題辞を頂きたい」と言ってきた。

私は、それを受け取って読んでみた。文章はどこも諧謔に富んでいて、人を喜々として笑い転げさせた。しかし、細かくその味わいを味わってみると、風刺をその中に込めてあったり、感激をその中に差し挟んでいく。ただ読者に柳橋の遊びの趣がどうであるかを教えてくれるだけではなく、同時に東京の今日の事情がどうであるかも教えてくれるのである。ただ東京の今日の事情がどうであるかを教えてくれるだけではなく、それを押し進めて考えれば、日本の将来の状況がいかによくなるかも分かるのである。これを「一大奇書」と言わないわけにはいくまい。しかし仙史はもとより自ら「無用の書」としているわけであり、世のこれを読む者も「無用の書」と必ず見なすことであろうから、この書を「一大無用の書」と言ってもまたよからう。

仙史は、才能も鋭く学識も広いが、自ら慎むようなことはせず、自分の気持ちに任せて行動するのである。世間では、あるいは仙史の才能と学識については知っていても、その志がとりわけ高く、その仕事について賞賛すべきものがあることを知らないのである。仙史はかつて將軍侍講であったが、それも免ぜられて、家で困窮の生活を忍んでいた。当時世間の人は皆（仙史を）軽視していた。ところが亀崖相公（松平乗謨）だけは仙史の才能を評価して、推挙して用いていた。仙史が陸軍の将であったとき、恩愛・威厳をともに兼ね備えて行動したので、荒々しい武士も、彼の統制に服したのである。三兵（歩・騎・砲）は、ヨーロッパの方式を学んで、その制度を一新する際には、仙史の力が大きかった。幕府の最期の時期には、幕府の蔵も空っぽになったが、仙史は金銀穀物の権を統括して、内外の費用を、ことごとく配分したが、陸海の将士は信頼し飢えるような気配はなかった。仙史は、財を生かす道を心得てい

ることであるよ。戊辰戦争の後、仙史は官職を辞して街の中で隠居して、気ままに暮らして自らの才能を埋もらせていた。しかし貧しく苦しい生活の中にあるのを見てみても、心の中は爽やかであって、少しも愁えていような気配はなかった。それは人より優れた点があるからではないか。

ああ、仙史は「有用の材」を持っていながら、自らそれを捨てて、「無用の書」を著して、自ら楽しんでいる者である。その心境を察してみるに何と悲しいことではないか。しかし、仙史が「有用」を捨てて「無用」を楽しむのは、仙史の仙史たる所以である。私はこの本を読む人のために、このことを一言言わないわけにはいかない。しかし、仙史がもし私の文を見たら、必ず唾を吐いて、「老耄のおしゃべりめ。また無用の言葉でもって、私の書を汚してしまった」と言うだろう。そこで私もその唾を受けることを甘んじようと言うわけである。

明治四年三月、碧雲山人、富士の麓の仮住まいにて記す。  
六十老人堯田大島信記す。

### 柳橋新誌二編

私は以前に『柳橋新誌』を著した。今からもう十二年前になる。その当時は自分でも柳橋の最新の情報を記すことが出来たと思っていた。そして読む者もその新しさを喜んでくれた。それから世の中が移り物事も変化して柳橋の遊びの趣も一変して、「新誌」ももう古くなってしまった。徳川氏が駿河に移ってしまったからには、東京府内の赤門や白壁（の大名屋敷）なども、すっかり変わって桑畑や茶畑になったものも少なくはない。

しかし、柳橋の芸者達は、そのままその仕事をやめずに、笛や三味線

を手にして風流の場に駆け回っている。これを幕府の旧役人が、兎のように逃げていたり鼠のように身を伏して命だけは長らえているものに比べれば、優っていることではないか。思うに明治維新で王政が一変したのにあわせて、柳橋も一変した。しかし、好事家が新しい事情を記しているわけでもない。ところで、このごろ私の『柳橋新誌』（初編）を盗んで刻している者がいて、風流の師弟達が多くそれを買って読んでみると聞いている。私はこの維新の日に当たって、あの既に古くなってしまった書物が読まれるのを嘆くのである。そこでこの『柳橋新誌二編』を書いたわけである。

※

慶応年間以来、様々な物を商っている店が、みな財産を半減させてしまっているのに、ただただ料理屋だけが家が立派になって富をほしいままにしているのは、どういうわけであろうか。東京府内の人口が半分に減っているにもかかわらず、遊びの客が倍に増えているからである。人口が減っているのに遊びの客が倍になっているのは何故であろうか。人々は王政復古の美風を楽しみ、後の子孫のことも考えずに、一銭の金を手に入れば食うことに費やすし、札びら一枚手に入れば飲むことに費やしてしまうからである。柳橋の酒楼は、どこもみな昔より威勢がよくなくなってきている。川長（かわちよう）や梅川は、橋の南北で覇権を競っているし、万八（まんぱち）もまた衰えた分の巻き返しを計っている。亀清（かめせい）・柳屋は、新柳街に新境地を開拓して、以前にもまして盛んである。思うに新柳街の土塀が作られてからは、柳橋は益々繁盛するようになった。大中村〔原注〕船宿にも中村があるので、土地の人はこの酒楼を大中村と呼んでいる〕は、火災に見舞われた後巨大な建

物をこしらえ、墨田川の東で覇権をとなえていた。一方柏屋・青柳は、また改築をして雄を競いあっている。深川・柳光・幾稲（いくいね）・大橋などは、安さを売りものにして繁盛している。有信亭の友白髪（干瓢を用いた菓子）や松中庵の小環蒸（おだまきむし）は、共に絶品という評判である。柳升はやたらに甘い味の料理を客に食わせるのは、その甘さに託して、その不味さをごまかしているのであろう。私はその味を知っているのです、その汁まで啜ろうとは思わないのである。それぞれの酒楼では華やかさ美しさを競いあっており、流行ったり寂れたりするのが互いに入れ替わりあって、巴屋がその中であってとりわけ力を増してきた。このごろは、それぞれの酒楼では意気がことさらに盛んであり、ややもすれば装飾を華美にするばかりであって、その中身の方をよくしようとはしない。その料理の値段ばかりを高くして、客の気持ちを満足させようなどは考えようともしない者が多い。もし豪快さを示し振るおうとするならば、大中村・河長・亀清・柏屋・梅川・青柳などの酒楼へ行つて飲むべきであろう。もし割烹の本当の味を云々しようというのなら、両国の酒楼の中では、巴屋の右に出るものはない。巴屋の親父は、今日の易牙（中国春秋時代の料理の名人）といってもよい。私は、春の暖かい風の吹く頃や秋の月の美しい頃といったよい時節に、両国の酒楼で酒を酌み交わすようになって、もう随分となる。しかし、今日のように客が多く、今日のように建物而立派である様を見たことがない。考えるにこのように繁盛するように仕向ける人がいなかったとしたらば、どうしてこのような繁盛を来すことがあつたらう。思うに、このごろの権勢を誇る貴人達は、皆孟嘗君のような権勢家で、（酒楼に来る）客は、孟嘗君の食客であつた馮驩（孟嘗君の食客で不平を言い豪華な食事を要求した逸話がある）であろうか。何と争つて旨いものを得ようとしていることか。しかし、柳橋の各々の酒楼は、ただ春申君や平原君の

ような権勢家が、立派な靴や剣を身に付けて来るだけではなく、斉・楚・燕・趙の主君自身が、馬車を柳橋に横付けするのである。ああ、何とこの地の盛んであることよ。

※

四区に別れている船宿の方も、また変革がある。表街（おもてちょう）では尾本・竹屋の二軒が店を閉じて、三河・糸中村がこれに代わっている。新上総は、名前を松葉と改めた。その裏岸でも、福吉が出て行って、丸屋が進出した。新若竹は、家を故（もと）柳橋に移し、米沢街の播磨は、翁屋と名を変えた。そのほか、貧富・はやりすたりに変遷はあるけれども、みな昔と変わらないが、升田・伊豆・鈴木の三家が、四区のリーダー格である。酒楼や船宿は、昔と趣が違わないけれども、酒肴の値段、舟の値段が、みな十年前に比べて四・五倍するのは、金貨の（乱発で）質が落ち、紙幣がこれに取って代わったことによるのである。もとより不思議とするまでもない。

ある人が私に尋ねた、「このごろでは、柳橋の芸者は、大妓・小妓を合わせると二百人余りで、ほとんど昔の倍に近いが、船宿や酒楼の方は、その店の数は増えていない。これらの店が芸者を呼ぶ回数が多い少ないについては、以前の帳簿と照らし合わせてみると、ほとんど変わりが無いのは、一体どういうことでしょうか」と。

そこで私は次のように答えた、「柳橋の昔の芸者は、容姿が秀でていなくても、技芸があった。技芸が秀でていなくても、才識があった。この三つの一つもなく、下女と同じような者は、ほとんどいなかった。しかし今はそうではない。姿も芸も才もないのに、ことさらに顔に白粉を塗って、身を着飾って、芸者と称している者が、十人中、七・八割が

たである。ただ見る眼のある客がこのような芸者を遠ざけるだけではなく、田舎者の愚かな男でも、時によると芸者の形はしているが、まともな芸者ではないのじゃないかと疑うほどである。芸者の御披露目をして一月以上たっても、まだ一回も御座敷のかからない者が、しばしばいる。それで芸者の数が日々に増えたとしても、各々の酒楼の利益が倍になるわけではないのである。思い巡らしてみれば、このごろ商売が傾き、街中で財産を失った者が多くいる。みな色々考えて、生きる道を求めようとする。そのために女の子で顔立ちのよい者は、（練習曲程度の）「明の鐘」一曲でも三味線が弾ける者ならば、争って芸者になろうとする。だから芸者の形はしているが、まともな芸者ではない者が、日々に増えていく原因になるのである。

姿も芸もない者は、自分でも客を魅きつけることが出来ないことを知っている。それで妄りに「転」んで巧みに身を売るのである。ただ金のことしか考えないのである。その風俗がひとたび蔓延ってしまうと、中等以上の名声を得ていた芸者でも、次第にその習慣に染まってしまう。ああ、柳橋の声妓の風俗が崩れてしまつて、そのいかげしい様子は口に出して言いたくもない。それだから柳橋の繁盛が昔以上であると言つても、実際は昔より大いに衰えていると言ふべきであらうか。しかし、もともとは客の方にも罪はあるのである。遊びにも道というものがあるのを知らず、風流が何物であるかもわきまえず、酒色に溺れ、芸者であるうとなかろうと、妄りに「転」ぶのを喜んで、自分を恋うていると思ひ、巧みに身を売るのを信じて、自分を愛していると思う者が、甚だ多い。たまたま、しとやかで軽薄なことはせず、柳橋の昔の好い風習を受け継いでいる者がいれば、みなで罵って、愚かで頑固な話の分らない老婆と見なすのである。客の方もこんなであるので、どうして芸者達が日々に淫らな風習へと走ることを止めることが出来ようか」と。

※

かつて、吉原が繁栄し、柳橋にも熱気があつたけれども、大名など身分のある者がそこで遊んで、情味を満喫したなどと言う話などは聞いたことがない。思うに文化・文政・天保以来、幕府の御達しが極めて厳しくて、旗本の士でも、遊べばおとがめを受けた。明治の新政府ではその弊害を正して、小さい過ちは許して、賢才の人を登用して、政府の大筋を正して、制度や重要な儀式の根本を調べ、花柳界に出入りし芸者と戯れるような些細なことについては不問に付している。だから高位高官の者が、時に蘇小（中国六朝時代の芸妓）の家に足繁く通うようなこともあるのである。かの大名や華族の若君や若様で、奥深い部屋で乳母・女中達に囲まれて育つて、一生遊びの里に出入りすることもないような方々が、（維新になって）ある日、急に解放されて、行くがままに任せられた。これは捕らわれていた鶴が籠を出て急に飛びまわったり、洪水が急に堤を破つて進んで行くようなものである。その勢いのよい様子は、想像できよう。芸者や太鼓持らも媚び諂つてやってきたり、口を開けて待つている様である。一度の御酌で百円、三味線一曲で千円、これはまさに「一曲に紅絹敷を知らず」（一曲の演奏の御祝儀がどれほど多いか分からぬ）と白楽天の「琵琶行」にあるのと同じである。下々の人の気持ちに通じ世間の事情を理解するには、遊びに及ぶものはない。高位高官の者が、遊びの奥にある深い意味を汲み取り、世間下々の真情・実体を理解できれば、政治において利益がないばかりではない。しかも西洋諸国などでは、帝王でも庶民と同じ遊びをしている。アメリカ連邦などでは、貴賤の区別はないのである。これこそまことの文明開化なのである。このごろ、我国では、昔の悪い習慣を止めて、努めて政治・文教を新しくしようとしている。善いことと言わねばなるまい。しかし、ただただ酒樓で遊び、芸者との楽しみを文明開化の道と考えている者には、私は賛

成しかねるのである。

※

ある殿様（山内容堂か）が、ある芸者を甚だ可愛がり、その情の濃厚さは膠や漆どころではなかった。私は、両方ともその人を知っていたが、その名前は忘れてしまった。その殿様が国に帰るとき、恋慕の情に堪えず、出立の日に秘かに家来の者に申しつけて、手紙をその芸者のところに寄せた。その芸者は手紙を一読して、命が絶えんばかりであった。これを袂に入れて、朝に夜に手放すことがなかった。大きな宝石でもあるかのように、この手紙を大事にした。私は、ある日この手紙を盗み読んでみた。その文は次のようなものであった。

私の愛する人よ。お別れした後も御変わりないでしょうか。私は、あなたと別れてから、あなたへの思いにうつとりと心奪われ、あなたの姿・形が目につかび、あなたのささやきが、いつも心の中に去来するようです。この絶えることのない思いは、決して断ち切れることはないのです。あなたはこの気持ちをお察し下さい。昼はあなたの写真を掲げて、夜はあなたの手紙を読んでいます。私の身は、あなたと離れてはいても、魂はあなたの側にいるのです。墨田川での川遊び、両国での酒宴、思い出せば夢のようであり心が悲しみ乱れるばかり、あなたよ、私の気持ちを察して下さい。この襦袢一着は、家の掟では重臣であつても軽々しくは与えてはならないものです。私は、あなたのためにこの掟を破つてこれを贈ります。どうぞ人には決して言わないで下さい。くれぐれも頼みます。

しかし私には心掛かりのことがあります。あなたと交わりを交わして、

夢の中に熊や蛇（懷妊の吉祥）が現れたのではないかと、密かに心配しています。もしそういうことになれば、手紙を私の侍臣に託して、すぐ知らせなさい。私は、来年になればまた江戸に行きますので、その時は必ずあなたを身請けして、離宮を作って共に老いを迎え、高殿では艶やかな三味線を弾いて、遊びの舟を庭の池に浮かべようではありませんか。それは何と楽しいことではないでしょうか。私は、この誓いを破るようなことは決して致しません。あなたよ、分かってくれるでしょう。自分の思いは尽きることがありません。ただこの手紙に気持ちを託すばかりです。

あたの御存知の人より気持ち尽くして

私はこの手紙を読み終わって、思わずはらはらと涙をこぼした。謡曲「松風」では、在原行平が須磨の浦に流され暮らしたときに、松風・村雨の二人の姉妹に思いを寄せた。そのいきさつは雅やかであり、その気持ちは悲しく痛ましい。千年の後の今日においても、その曲を聴き、その舞いを観ると、人は悲しみ涙を催すのである。このごろでは、風俗人情が薄くなり、人の心は狡猾になって、昔のような情の深さは全くなくなってしまったのである。今この手紙を読んでも、まるで昔の人と同じで、傍からだと愚かに見えるほど真実の情愛を尽くした風があるのである。何とその想いは切実で哀れではないか。私は好んで芝居を観る。（芝居の中にある先代萩での）頼兼と高尾の件については嘆かわしいばかりだ。頼兼が墨田川の中洲で高尾を斬って、その血が墨田川に流れた。何という殺風景か、このことは先ほどの殿様の情愛の話と同日に語ることは出来ないのである。

※

流行（はやり）歌に「一・六ドンタク、大いに宴を張る」とある。毎月一と六の日は、ヨーロッパの日曜日の制度に倣って、各省庁ではみな役所を閉めて、役人達は休みをとるのである。あるいは大いに宴席を設けて、あるいは遊びの舟を浮かべて、酒を飲んでゆつたりとして平日の忙しい仕事の骨休めをするのである。芸者達はいつもお酌に侍っている。（芸者達は）ただ（役人達の）姓名やどこに住んでいるかを知っているだけではなく、官爵が高いか低いか、給料が多いか少ないかも知っている。職員録とか官位表などを熟読し暗記していない者はいない。ある日、私はある酒樓で酒を飲んでいた。隣の席では二人の芸者が客を待っていた。甲の芸者が乙の芸者に向かって言った、「お前は、（私に）ちゃんと奢って下さいよ」と。乙が言うには、「どういう訳があつて」と。甲が言うには、「お前の好きな人が、この間何々の官に昇進したそうじゃないの。それは奉任第一等で、俸禄は三百石以上よ。めでたいことよ、めでたいことよ。大丸（呉服屋）の錦の着物でも丸利（簪屋）の珊瑚の簪でも、お前の望み次第よ。奢ってよ、奢ってよ。福を少し分けて下さいな」と。すると乙は首を振って言った、「違う、違うわ。あの人は立身出世したといつても、おべっかを使つてなったのよ。肩をすばめて愛想笑いをするのよ、私でも恥に思うわ。しかもあの人は、性からのケチンボウで、遊ぶ時だって、船頭や箱屋に二朱札一枚くれたことがないのよ。ややもすれば人に、自腹を切らせて尻拭いをさせるのよ。しかもあの人は態度が大きくて、いつも人を下女のように見ているの。とても堪えられないわ。たとえあの人が自分で祝ったとしても、私にどうして祝つてなどくれましよう。目刺しの干物一匹だつて買つてくれはしないわ。姉さん分かつてよ。姉さんも聞いたでしょう、裏河岸の餓鬼芸者が、山の手の役人の大将を生け捕ったことを。三月芸者を弄ばせるように仕向けておい

て宿代三百円を払わせたそうよ。本当に彼女は腕がよい。「後生畏るべき」者ですよ。私がいつも言っているでしよう、本当の愛人には「情」を求めるが、(仮の)旦那には「利」を求めると。もし「利」を求めらば、「勅任」以上を選ばなければいけません。そうでなければ知事か華族。奏任とか判任(七位以下の官吏)は、位は高いんだらうけれども、私たちのお腹を充分に満たしてはくれないわ」と。話がまだ終わらないうちに、楼の外で声があつて、高く叫んで、「芝居の役者の給金一覽だよ」と。芸者は急いで箱屋を呼んで言うには、「栄どん、どうか役人の月給一覽を買ってきてください」と。

※

ある書生が、学校に入り大いに英語に通じていた。ある晩、柳光亭で酒を飲んでゐた。芸者としゃべるとき、半ばは英語を使つていた。芸者が言うには、「郎君(だんな)だけが英語を知つていて、私たちには分かりません。これでは全然面白くありません。どうか私に英語を教えて下さいよ」と。書生が大層得意になつて言つた、「お前は偉い、お前は偉いよ。もし英語を学べば、数カ月すれば必ず大家になるだらう。僕は、英語については通じないところがないのだから。お前が学ぶのに、どこから始めたらいいものだらうか」と。芸者が言うには、「仲間の中で呼びあうのに、普通の言葉を使ったのでは、趣がないようです。郎君どうか最初に、私たちの名前を覚えて下さいな」と。書生が言うには、「妙案、妙案」と。芸者は、「お竹」を尋ねた。「バンブー」と。「お梅」を尋ねた。「プロム」と。「阿鳥」を尋ねた。「ビルド」と。「お蝶」を尋ねた。「シェーブル」と。受け答えは響きに応ずるかのようである。芸者はまた「美佐吉」を尋ねた。書生は頭を垂れてさんざん考えたあげく、答えられなかつ

た。また「御茶羅(おちゃら)」を尋ねた。書生は益々困つてしまつた。その額の汗を拭つて、「今日、僕は辞書を持つてこなかつた。近いうちに英語の字引を一冊持つてきて、お前たちのどんな質問にも答えてやろう」と言つたということである。

※

金銀に銅を混ぜることが多くなつて、物価が騰つてきている。さらに金銀が、紙幣に変わつて、物価がますます騰つていく。しかし芸者の揚げ代は昔と同じである。だから祝儀の方は昔の何倍かにならざるを得ない。このごろは、客が大妓に払うのは最低の場合で二分、最上の場合は一円(一両)である。小妓であつても一分か二分の間である。もし昔のやり方に倣つて、芸者に一分を支払い、箱屋に二朱を支払うだけであつたとすれば、誰もがケチンボウだと罵ることになる。どんな物の値段でも、みんな四・五倍には騰つていく。芸者達の衣食の費用もそれにつれて騰らざるを得ないのだから、祝儀だけを昔と同じにするのは、道理に合わないことではないか。もしケチを智とするなら、遊ばないのが一番である。芸者が祝儀を客から受け取つて、これを全て抱え親の手に渡せば、自分の分はないことになる。だからそれをくすねて私費に当てるのである。三だとその中の一をくすね、五だとその中の二をくすねる。本當の親子であつても、くすねない者はめつたにいない。

あるひよつこ芸者がいた。まだくすねるやり方が巧くない。ある日先輩の話を聞いて、ようやくくすねる味を悟つたのである。たちまち札一枚をくすねて帰つてきた。抱え親は、利口で、家に札を隠す所もない。あれこれ考へて、たちまち一計を思いつき、家の軒の少し壊れたところを見つけて、こっそりと札を板の間に挟んでおいた。自分では、この上

ない妙案で、まことの万全の策だと思っていた。ある日夕立があつて、それがたちまち晴れた。そのひよっこ芸者が家において、抱え親は風呂屋へ行つていた。芸者は札を取り出して飴を買おうと思つたのである。屋根板を開けて、札を取り出した。札は湿つていて、真ん中で切れてしまつた。芸者はびっくりして、色を失つた。こつそりとその半分の札を持つて、近所の婆さんに尋ねた、「一分の札が、真ん中で切れてしまつた。半分の二朱として使えますか」と。これを聞いた者は、笑つて彼女を哀れに思つたということである。

※

ある藩の武士が数人、ある酒樓で酒盛りをしていた。酒の肴が陳び、三味線や唄で盛り上がつていた。大いに面白く、意気も盛んであつた。(治安維持のための兵の)隊長は特別に命令を出して、自分の好きな芸者を呼んだが来なかつた。何度も呼んで来いと酒樓の女中に催促した。女中が言うには、「御贔負の芸者は、今日は他の客のお供で舟遊びに行つております。帰りはあるいは遅くなるかも知れません。どうか他の者を呼んでやって下さい」と。すると隊長がむつとして、鉄扇を握りしめて言うには、「京都の芸者は、馴染み客のお呼びがあれば、他の席を断つて、早速にやつてきてお相手をするものだ。柳橋だけがどうしてこのように秩序がないのか」と。女中が言うには、「江戸と京都とでは、風習ややり方が違います。しかも柳橋の芸者は特別の馴染みがあつても、京都のようにそれを大ぴらにするのとは、同様ではありません」と。隊長が怒りを爆発させて、大声をあげて言うには、「この女中め、何とおしゃべりな。失敬ではないか、失敬ではないか」と。大杯を取つて女中の顔をめがけて投げつけた。すると間違つて燭台に当たつて、チンという音が

して、杯は碎けて火は消えてしまつた。女中は驚いて逃げた。すると隊長は刀を手に持つて女中を追いかけようとした。周りの者は皆びっくりして、男達は腕を出して前に立ちはだかり、女達は後ろから抱いて止めるのである。慰めたり謝つたりして、男の怒りは何とか収まつたのである。女中はその場を逃れて調理場へ行つて、板前に言うことには、「このごろの客は、凶暴な者が多いよ。酒を飲んで道理の通らない論を吐いたり、あるいは御碗や御皿を投げつけたり、刀を抜いて柱を切つたりして、癪にさわつて堪えられないほどです。酒や肴の代金を二・三割増にして金をふんだくつたところで、気が晴れるどころではありません。ほんに散切り頭の唐人(田舎侍)は、おつばらうべきよ、おつばらうべきよ」と。

これを聞いて私はこのように考えた、「太平な世の中が続けば、武士の気風は緩んでしまう。戦の後には、士気は自然と高まつてくる。戊辰戦争以降は、殺気はまだ落ち着いていない。(鴻門の会での)項莊・項伯よろしく、ともすれば酒樓で剣舞をし、岳父も老いばれてはいるが、まだ時には玉斗を砕くだけの覇気はある。このような勢いには、対処のしようがない。最近、酒の席で新しいやり方が流行つてゐる。杯を相手に献じるときに、多くは杯を投げて相手の手に送るのである。李白の「桃李園の序」では、「羽觴(羽の形をした杯)を飛ばして月に酔う」とある。このごろの武人は、昔を好む者が多いことよ。この新しいやり方も、その典故を尋ねれば、これをこの「飛」の字から採つたのであろうか。思うに杯を飛ばし合うのは、古いと言えば古いし、新しいと言えば新しいし、変わつてゐると言えば変わつてゐるし、豪気と言えば豪気である。つまり額を割つたり目を傷ついたりする事変を生じることになる。これがそれこそ飛んだことなのである。器だつてまた碎け易い物である。ここはむしろ通常の礼儀にしたがつて、杯のやりとりをした方が良



いのではないか。私は年輩の芸者がこのように言っていたのを聴いたことがある」と。

※

ある一人の芸者が三味線を手にとつて、「その紋所は菊と桐、あれは宮家の紋所」と唄つた。客がそれを聞いて感心して、「広々としていて、調和がある。婉曲のようであるが、実は率直である。それは皇室の徳であるよ。今盛んな様は周の文王のようであつて、『詩経』の大雅の風がある」と言つた。芸者がまた、「その紋所は撫子か、それはゴンチャン（河原崎権十郎、後の九代目市川団十郎）の紋所」と唄つた。すると、客は不愉快になつて言つた、「権十郎は俳優である。俳優は河原乞食である。お前は、乞食を天子様と並べて唄つている。何と筋から外れたことよ」と。その芸者がおもむろに答えて言うには、「あなたは唄や音楽のことを御存じなのです。『詩経』の「溱洧」や「桑中」は、民間にある淫乱・放逸の詩であつたと聞いています。聖人孔子はそれを『詩経』に採用して、宮廷で演奏され歌われる「大雅」・「小雅」の前に置きました。あなたは、その聖人をとがめないで私をとがめるのですか。あなたこそ何と筋から外れているではありませんか。あなたは、大友（大谷友右衛門）の紋所を知っているでしょう。薩摩の殿様と同じです。薩摩の殿様は、薩・長・土の三雄藩の中のリーダーであつて、天下の人が恐れているところの御方です。しかし、薩摩の殿様は大友に忌んでその紋所を変えさせたと言う話は、聞いたことがありません。薩摩の殿様は俳優に怒らないのに、あなたは私に対して腹をたてている。何と筋から外れているではありませんか」と。その客は顔を真っ赤にして帰つて行つた。私は思った、「このごろ、柳橋の芸者で、役者と私通する者が多く、

相撲取と私通する者も少なくはない。三代吉が（沢村）訥升に通じ、小花が（沢村）田之助に通じ、阿季が高見山に通じたのは、みなその志を成就した者である。千吉は（相撲取）相生に抱かれて死んだ。相生は、そのため十日間も泣き暮らした。俳優は着飾り化粧して、妖艶な姿・あだっぽい様子は、女と同じである。芸者達が恋い慕らせ思い慕らせるのは、もとより道理がないわけではない。力士は姿・形が大きく、筋骨隆々。雷様のような者もいるし、夜叉のような者もいる。だから俳優と同じで芸者達の情夫になるのである。しかし、私はこれが不思議でない。思うに四十八手があつて芸者をモノにするのであろうか、そもそも相撲膏薬のような粘着力があるからなのであろうか。私はこれを西洋窮理学の先生に聞いてみようと思う」と。

※

二人のまだ若い芸者が、湯屋から帰つてくる。手には炒り豆を一袋持つて、食べながら歩いている。甲が乙に向かつて言うには、「私は、昨日、恐いことに遭いました」と。乙が言うには、「どういふことがあつたの」と。甲が言うには、「昨日、翁屋の客のお供をして、向島で遊んでいました。摘み草をして楽しんでたところ、たちまちに散切り頭の武士が二人、大きな馬に乗つてやつてくるのが見えました。その速いことと言つたら風のようにあつて、人々は皆あちこちに避けたのです。私はうろたえて、危うくその馬に蹴られるところでした。喜介どんの助けで何とか難を逃れました。恐ろしいことよ、恐ろしいことよ」と。乙が言うには、「恐ろしいことよ。最近聞いた話では、天王橋の近くで、馬に乗つた人が、一人の婆さんを踏み殺したということです。（婆さんは？）目の玉が飛び出していたと言うことだ。馬に乗つた人は、煙のように逃げ去つ

て捕まえることができなかつたそうだ。憎いことであるよ」と。自ら目の涙を拭いて呪いを唱えて言うには、「鶴亀・鶴亀〔原注〕当時の女兒の呪いの言葉」と。甲が言うには、「このごろ、馬に乗る人は、どうして節操がないのでしょうか。裸足で馬に乗る者がいるかと思えば、下駄履きで乗る者がいる。傘をさして乗る者もいるし、懐手にして乗る者がいる。奇々怪々、曲馬団と変わらない。疾風のように走り雷のように駆ける。人混みもお構いなしに通り過ぎていく。何とむやみなことだろう。昔、殿様が馬に乗っているのを見ると、威儀正しく物静かで威厳があつて、これぞまことの武士という観でした。しかし今の散切りは、姿は異人と同じです。憎いことよ、憎いことよ」と。

乙が言うには、「私の家に春画本が三冊あります。姉さんは、隠して見せてくれませんか。昨日、姉さんがいなかったの、私はちよつと盗み見しました。その中に役者の訥升のような好い男がいましたし、中村仲藏のような憎らしい男がいました。その鬚は鼠の尻尾のような形もありましたし、糞舟のたわし（舟を洗うたわし）のような形もありました。しかし、最初から最後までどこにも散切り頭の男が、女と寝ている場面はありませんでした。私はどうも散切り男は色事の方は全く駄目なんじゃないかと思つてしまいます」と。甲が言うには、「つまらないことを言うのはおよしなさい。お前は忘れたのかい。節句の時の客で、散切り頭がいただらう。彼はとても「助平」で、姉さん達は皆嫌がつていた。私は思うに、散切りの男は、普通の人に比べれば、むしろ好色ですよ。芝居で扮する法界坊と同じですよ。湊屋での断髪客も、また嫌な人でしたよ。ややもすれば人に迫つてきて、裾をまくるのです。嫌よ、嫌よ」と。幼い声で、舌も滑らかに、ペチャクチャ、ペチャクチャ。たちまち炒り豆の袋の底が破れて、炒り豆がはらはらと下にこぼれてしまった。甲はびっくりして言つた、「ちえ、しくじつた」と。乙が言うには、「こ

れは散切りを罵つたばちが当たつたのよ」と。

※

芸者で夫がいるのは、ちよつど酒の中に水を注いだようなものである。その味は薄くて芳醇ではない。芸者で子供がいるのは、ちよつど酒の中に砂糖を加えたようなものである。その味は重くて清らかではない。昔は芸者ではらむ者がいると、皆羞恥の気持ちを持ったものである。墮胎薬を求めてお腹の子をおろした者がいた。また引つ込んで芸者の籍を抜いた者もいた。しかしこのごろでは、風習が一変して、芸者達が子どもを生むのは、一般の家と同じになつた。多くは乳母を雇つて子供を育てる。客のいる席でも、また公然とこのことを話して、平気で恥じる様子もない。何と妙なことであるよ。ある芸者がはらんでしまった。訳ありの客が十人いる。その父親が誰であるのかはつきりしない。そこで一人の客を招いて、はらんだことを告げた。客が言うには、「お前は、何人の客と関係がある。どうして俺の子だと言うのか」と。そこでまた別の客に尋ねた。客が答えて言うには、「お前は、何人もの客と関係がある。どうして俺の子だと言うのか」と。十人の客に全て尋ねたところが、その答は、異口同音であつた。その芸者は甚だ迷つた。そこで加藤清正公を祭つてある神社に赴いて祈つてみた。芸者が祈つて言うには、「私ははらんだが、その父親が誰か分からない。どうか神様、父親が誰か教えて下さい」と。すると清正の神が夢に現れて言うには、「お前には十人の夫がいる。十人の誰も同様に枕を共にしたであろう。だから神の私にも子供の父親が誰か分からない。お前のお腹の中の子供は、きつとそのその父親を知っているに違いない。お前は（お腹の子供に）このことを聞いてみなさい」と。

その芸者は夢から醒めて納得がいった。夜が更けて人がいなくなると、その芸者は手を洗つてうがいをして（身を清めて）、香を焚いて、座つてその腹を撫でて、俯いてその陰部をのぞいて、落ち着いて語つて言うには、「神様の仰せがありました。お前に、私のためにお前の父親の名を語るようにということ。お前は実の父親の名を告げなさい」と。するとたちまち腹の中から声があつていうには、「母さんは何を疑うのか。母さんには十人の夫がいます。つまり十人の力を合わせて造つたものです。一人が首を造り、一人が腹を造り、胸を造つた者がいて、背中を造つた者がいて、二人が両手を造り、二人が両足を造つて、尻と陽茎とは、またそれぞれが別にこれを造つたのです。だから子供に父親が十人いるのです。どうしてこれを一人のせいにする事ができません。ところで子供の十本の指は、別にこれを造つた者がいます。母さん、忘れはしまい。母さんの陰部の奥にまでは入れないで、ただ指だけを母さんの陰部に入れただけの者が、時々いましたね。これが私の指の父親です」と。

※

ある芸者がいた。口は巧かったが思慮の方は少々まわらなかつた。人は皆彼女を名付けて「おしゃべり」と言い、「節操無し」と言つた。ある日、他の芸者達とある公（三条実美か）の宴席に侍つた。酒の席がたけなわとなつたとき、その芸者は、打ち解けた様子で公に尋ねて言つた、「公卿で京都にいる人は、皆花札を作つたことを仕事にしていて聞いています。殿下も以前、花札を作つたことがあるんですか」と。公は愕然として言葉を失つた。しばらくして答えて言うには、「昔は、我々も暇だつた。あるいは戯れに誰かが作つたのであろう。たとえ作つた人がいたと

しても、官爵は私よりはるかに下の者であつたらう。この頃は、国家の多事につき、またこのような詰まらない暇つぶしをする者はいないのは、当然のこと」と。するとその芸者は膝を叩いて言つた、「分かつた、分かつた。このごろ街中では花札が甚だ品薄です。値段も従つて高くなつていきます。親父もいつもこのことを嘆いています。私もまたその訳が分かりませんでした。今殿下の話を御伺いしましてすっかりと訳が分かりました。作る者が少ないのに、使う者が多いから、花札はいつも足りないのです。値段が高いのも、当然のことです」と。そこにいた者は誰もが、手に冷や汗を握つたと言ふことである。

※

武士が二人、綺麗な袴を身につけ、立派な刀を差して、ある酒樓で向かい合つて酒を飲んでいた。酒のやりとりが何度もあつて、話が国家の情勢に及んで、ついに郡県制と封建制との善し悪しを論じ、議論がいつまで経つても決着しなかつた。議論が白熱して、あたかも口から火を吐き、舌から血を噴くかようであつた。酒も冷たくなり、肴も爛れてしまつても、氣にする様子もなかつた。数人の芸者が付き添つて座つて、傍らで聴いていたが退屈していた。一人の芸者が立ち上がつて用足しに行つた。別の一人の芸者もついて行き、廊下で出会つた。甲が言うには、「今日の客は、何というトンチキだろう。酒も飲まず、肴も食わずに、ガヤガヤと、長いことわけの分からないことを話している。私は、生まれつき、いわゆる議論というものが好きではない。こんな議論を聴いていると、頭がボーとして目が眩みそうだ」と。乙は、たいそう元氣な様子で言つた、「姉さん、鬱ぐのはおよしなさい。私があの二人の愚か者をとつちめましよう」と。そこで連れ添つて席へ帰つてきた。二人の舌

戦は依然として激しかった。乙は進み出て二人の客の間に並んで座って、大杯を挙げて尋ねて言うには、「あなた方が論じているのは、一体どういう議論でしょうか」と。客が言うには、「僕たちが論じているのは、日本の天下の政治の形態について、つまり郡県制と封建制との利害得失についてである。お前達のあずかり知るところではないぞ」と。

乙が杯を勧めて言うには、「あなた様方は何と悪いをなさっていますね。そもそも郡県・封建の善し悪しについては、秦・漢の昔から、先哲達が論じていて余すところはないのです。今また何であなた様方が、ガヤガヤと言う必要がありましようか。私はこう聞いております。アメリカには共和政治というのがあって、極めて公明正大であって、堯・舜の政治であつても及ばないそうです。あなた様方はもう古人が議論尽くしたカスなんか捨ててしまつて、郡県だの封建だのという説を両方とも止めてしまつて、共和制度のよさを言うべきですよ。遊びというものは、共和して〔共に仲良くして〕楽しむのが一番大切なことですよ。今あなた様方は酒楼にいます。酒や肉を置いても食わず、管弦があつても打ち捨てて演奏もできません。空論妄言ばかりで私たちを片隅にほつたらかして、眠たくさせています。これを共和して楽しむと言えましようか。あなた様方は、本当に遊びを知らない人達ですね。私が大統領になつて、この理屈に走つた状況を建て直そうと思ひます。どうぞ、まず最初にこの罰杯を飲みなさい」と。するとこの二人の客は大いに恥入つて、二人一緒に首をうなずかせて、謝つて、「謹んで女王陛下の仰せを承ります」と言つたのである。

※  
最近ある客がいて、一人の芸者を身請けしたという話を聞いた。私は

その客の方は知らないのであるが、その芸者の方は知っている。芸者の名は阿辰（おたつ）といつて、年の方は十七・八。私の目から見れば、容姿は中の上にあたり、技芸は中の下にあたる。その身請けの値を聞くと、七白金ということであつた。私は驚いてしまい、倒れるところであつた。この十何年の間で、柳橋の芸者で、七白金もで身請けされた者はいない。阿辰は後進である。御披露目をして一年も経たないうちに、このような豪華な客に出会つたのである。最高の幸福といつてもよい。しかし、これはただ阿辰にとつての幸福であるばかりではなく、また柳橋全体のためにも、一片の光明とならうか。

昔、阿幸〔原注〕今は「大幸」と称している〕は、本阿弥氏からの五百金での身請けの話を断つた。本阿弥氏はこのことを恥じて、それでは阿幸より名声がある者がいないかと捜して、阿金をものにした。その時、人々は本阿弥氏の豪氣を賞賛して、阿幸の意氣地に敬服して、美談とした。今日の目からすれば、五百金での身請け、五百金の断り、これを豪氣とか意氣地とかに感じるだらうか。思うに（昔と今とでは）人材に優劣があつたわけではあるまい。世の情勢が移り変わったからである。このごろ名だたる芸者で、上の部に位する者なら、皆一月の収入は、大体五・六十金である。これを昔と比べれば、天地の相違がある。芸者の数も増えて、今では二百名余りに及んでいる。しかし、その中で水準に達した者はと選んでみると、大半は「かす」ということになつてしまふ。文久二（一八六二）年の夏、私は友人の柳川春三とふざけて柳橋芸者の二十四番花番付を作つてみた。阿金を梅になぞらえ、阿幸を桜になぞらえ、阿久は李、小勝は杏、美代は海棠、阿紺は桃、阿兼は菊、阿清は牡丹、小繁は芙蓉、阿竹は蓮、菊寿は百日紅、梅吉は藤、政吉は杜若、千吉は芍薬、阿蓮は水仙、小照はつつじ。そのほかに、増吉・小糸・阿常・三代吉・阿軽・久吉・阿角・阿直について、それぞれを名花になぞ

らえた。しかし、今でも活躍している者は、ただ阿幸・菊寿・政吉〔原注〕今は阿郁と称している〕・阿蓮の四人だけである。阿清・千吉・久吉の三人は、この世を去り艷名を過去帳にとどめている。その他は皆あちこちに散らばって、その居場所が分からない者も多い。ああ、十年という時間、浮き沈み、栄枯盛衰はただ芸者だけのことであろうか。

※

手車に似てはいるが手車ではなく、駕籠に似てはいるが駕籠ではない。乗る者は仰向けでうすくまり、推す者はうつ伏で走っている。鉄の車輪と木の長柄、ゴロゴロと音をさせてやってくるのは人力車である。ある酒樓の二階で、芸者達が数人欄干によりかかってこれを見ている。一人の芸者が、左右の芸者に向かって、「けち臭いなあ、車って。このごろこの車が、街の中になくなって、東にきしり西に轟いているわ。おかしなことね。以前は遊びの客は皆四手駕籠を雇っていました。四手駕籠というのは、便利で快適です。駕籠屋もテキパキしてるし、かけ声をかけて勇壮です。その声は明瞭で澄んでいて、人の遊び心をかきとめます。これが本当の江戸っ子の気性です。それに比べて人力車はけち臭くて、殆ど乞食のいざり車と同じと言えないでしょうか。このごろ、客は多く駕籠を止めて車の方を取るの、その値段を問題にするからです。何とけちなことでしょう」と言った。

年寄りの芸者が側にいて、少し笑いかけながら言うには、「お前はまだ若いね、まだ世の中に移り変わりがあるということを知らないのよ。昔だったら、江戸で御大名の行き来を見ると、御付きの者は雲のように多くて、槍を手にした二人の奴が前に控え、馬に乗った者が後ろに控えていて、威厳があつて豪華さを競っていました。しかし、今はそうでは

ありません。一人馬に乗って走り回り、簡易が風俗となって、儉素が尊ばれています。むしろこのようなのが美德とされるようになりました。政府は最近、巨万の金を投じて、鉄道を作り、蒸気で走る車を通わせようとしている、と聞きました。この蒸気車の速いことといったら一瞬の中に十里走り、一刻に百里走るといふことです。横浜までの往復も、次の食事の時間までもかからないそうです。大阪や長崎でも一日で行くことができ、中国やインドでも三日で行けるそうです。これはなるほど妙々車と人が言うだけのことはあります」と。一人の芸者がせわしい様子で尋ねるには、「インドにも行くことができるのですか」と。「そうですよ」と。「そうだったら、私はその車に乗って、天の川の岸に遊んで、一度牽牛と織女の逢い引きを見たいと思います。どうでしょうか」と。一人の芸者が、その芸者の背中を叩いて言うには、「それは止めなさい。お前の美貌だったら、天の川に行ったら牽牛に人目惚れされるだろう。私は、織女が嫉妬して、必ず「車止め」の柵を「鵲の橋」にこしらえて、両国橋のようになってしまふのではないかと心配します」と。それを聞いて、一同大いに笑ったと言ふことである。

※

天心に月が高く昇った頃、店の若い者は酒樓に鍵を掛け、川の水面に風が涼しく吹いて、船頭は舟の中で眠りに付いている。夜鷹蕎麦の、チリンチリンという鈴の音も遠くなって、茶飯豆腐屋のぼんやりと点つていた灯もすべて消えてしまつてゐる。あたりの街はひっそりとしていて、犬の吠える声さえ聞こえない。ある小酒樓で、酔客が床についていた。眠ろうとしても眠ることができず、話をしようとしても口に言葉が出てこない。心の奥深くに悩みを持つてゐるかのようであつた。一人の芸者

が寂しげに枕元に緊張した面持で座っている。客は壁に向かってタバコの煙を吐き、灰吹を打っている。灰吹を一つ叩いて、話し始めて言うには、「このごろ私は、お前のために多くの思慮を尽くし、お前のために多くの金を使って、また切々たる心の中も、すべてお前に話したので、お前にもそのことはよく分かつているだろう。この間も、この酒楼のおみさんに頼んで、懇切にお前に言いつけて聞かせてやっているのに、お前は聞き入れようとしない。お前もまた物の分らない奴だなあ。どうしてそんなに強情を張るのだ。今、この世で、お前のように馬鹿律儀で昔気質の者はいないぞ。お前がもし了見を変えれば、ただお前にとつて具合がよいだけではなく、お袋さんだって老境の中で安楽な身となるであろうに。お前はこうしてこの事をよく考えてみないのか」と。

その芸者は、首を垂れて黙っている。両眼から涙を止めどなく流して、その白い歯で袖を噛みしめている。暫くして言うには、「旦那様は、どうして醜悪な私のような者に心をかけて下さり、しきりに親切なお話しを下さるのですか。私だって決して木石ではありませんので、あなたの情けに感じ入り、あなたの御恵みを心に止めております。感謝の言葉もないほどです。しかし、敢えて御話しをお受けいたしかねるのには、そもそも訳がございます。詳しく御話しいたしましょう。私はこのように身を泥水の中に捨ててはおりますが、もとより女郎と業を同じくしようとは思ってはおりません。三味線や唄で興を売りまして、母を養おうとするだけです。私の父はもと武士です。禄高は五百石で、父が死んでからは兄が後を継いでおります。兄は若いときより文武の業を勤めて、忠孝の道については大抵は身につけております。先年の明治維新の政変の際の動乱で、江戸はごたごた騒がしく、同僚の者数百人は、皆驚いて落ちつきを失っていました。私の兄は一人憤りを発して食事も喉に通らないほどであり、政府に建言することが三たびでした。しかしそれは聴か

れませんでした。そこで憤慨の余り、私に老母の面倒を見るよう遺言して、同志の士と東路の果てに走って、百戦して動ぜず、ついに節に殉じて討ち死に致しました。それから親類は逃げ隠れして離散し、どこにいるかも分かりません。かつての朋友も遠ざかって私たちのことなど顧みてもくれません。私はただ母と二人暮らして、心細くて頼る者もおりません。屋敷は官に取りあげられて、家財道具なども賊に盗られてしまいました。飢えや寒さが日々逼迫して、家計を支えていくこともできません。幸いにも私が幼いときに歌や舞を習ったことがございますので、この地にやってきて芸者として名を掲げて、恥を忍んで醜い業を売っております。皆様のおかげをもちまして、何とか母を養っていくことができず。私は、今、天命に従って、確かにこのような上ない幸福を受け、老母も安らかに余生を送っております。しかしながら、私がどうして父兄の名を汚すわけにまいりましょう。祖先の霊を辱めるわけにまいりましょう。旦那様、どうぞ事情を御察し下さい」と。こう言い終わると、両手にあふれんばかりの血のような涙が、自分の膝の上にポツポツと落ちてくる。その時、隣の猫が鼠を捕らえた声が聞こえてきた。鼠の声は哀れみを催す。その声は「忬忬（チュウチュウ）、忬」は憂えるという意味があり、これと鼠の鳴き声をかけている」と。

※

「沖の暗いのに白帆が見える。あれは紀国みかん船」これは古い流行歌である。このごろはその歌詞を変え、新たな手振りでもって、これを弾き舞っている。その調子は忙（せわ）しいようであるが反面しとやかに、その音はげびているようであるが反面優雅であり、両手で輪を作って舞い、片足をあげて踊るのである。何とも妙な光景であるが、今盛ん

に宴会の席で行われている。世の言い伝えでは、紀国屋文左衛門は、時化を犯して海を渡って、南紀の蜜柑を売って、大儲けをした。さらに次々に財産を増やしていった、春秋時代の陶朱に匹敵する富を築きあげ、ついに江戸一番の大金持ちになった。彼は色里での遊びが好きで、豪奢を極めており、前人にこれを凌ぐ者はなく、後世にも及ぶ者はなからう。子供であつても、今でも紀国屋文左衛門の名前は知っている。彼は一快男児といつてもよからう。

今では、江戸の商人でこのような気炎のある者はいない。その財産を日々に減らしていつているのが分かるであろう。努めて表面を飾っていても、内情は疲れと飢えとを免れない。ああ、何と衰退へと向かつていくことであるよ。ところで横浜が開港して以来、商人達は外国との交易を行つてゐる。商売に失敗して破産する者もいるが、しかし身一つで行つて、三年や五年でもつて、大いに家を興した者も、また多いのである。このごろ柳橋で、商人でよく遊ぶ者は、横浜の客が多い。後進の芸者で、大いに名声の高かった、阿俊（おしゆん）・小鳴（こなる）なども、みな横浜の人に身請けされた。前年、横浜のある商人が家産を傾けて、まさに店を閉ざして引き上げようとしていた。たまたま紙幣が発行されるときであつた。そこで百万金で楮（こうぞ、紙幣の原料）を買つた。たちまちの中に三万円の利益を手にした。それからは米を買えば米が騰り、油を買えば油が高くなり、今では資産十万を超えるということである。私は思った、「横浜の交易が、益々盛んになれば、豪奢の徒も、益々花街での遊興を競うであろう。そこで天はまた紀国屋文左衛門のような者を生むのであろうか。ああアメリカ・プロシア・イギリス・フランスの船は、ありとあらゆる荷物を載せて、次々とやってくれば、南紀のみかん船など、どうしてまた歌われるであろうか、どうしてまた舞われるであろうか。（それこそ忘れ去られてしまふであろう）」と。

※

袁枚の「硯を守る」という詩に、「硯を撫でて手に取つて愛憐している。これは十五才の美しい女性に対してよりもなお甚だしい」とある。大体は「愛憐」の二字は、若い娘に使う文字であつて、二十以上の者に使うべきではない。しかし、遊び慣れて情を解する男が、十五・十六の小娘を抱くのは、要するに少しの趣もない。これは人形を弄ぶのと同じことである。二十以上で、男女の間の甘さと酸っぱさを嘗めた者でなければ、ともに語ることはできない。今日の人は、あるいは子供と戯れて、甘い酸っぱいを知らないと責めたり、「愛憐」の二字を老妓の股間に求めようとする。これは両方とも色の道をわきまえない者と言うべきである。もし百文の銭をどぶの中に捨てるとすると、それでもポチャンという音をたてる。もし芸者遊びの妙味も問題にせず、真情を理解せず、財産を徒に芸者に投じる者は、何の益があるか。家中の貨幣・穀物・器物・財産一切がっさいをとつて、一緒に大洋に捨てれば、ドンブリと大音響をたてるであろう。

金錢を（芸者の）騙し言葉のために失つて、財産を酒色の心のために失う者を痴漢（バカ）と言う。一方また別の種類の人もいる。長年花柳の街を往来しているが、腹の中には一片の風流の情緒もなく、嘘偽りを言つて策謀を弄して、逆に芸者の懐から財を奪う者を悪漢（ワル）と言う。バカは笑うべきであり、ワルも憎むべき者である。バカもワルも過ぎたり及ばなかつたりする者であつて、遊び上手と言うことはできない。バカとワルとの中程の境地にいて、財産も失わず、名を汚さない者は、風流花柳会の親玉であつて、非難の余地はない。

※

一人の芸者に二人の馴染み客がいた。一人は商人で一人は武士である。武士の方には奥さんがいるが、商人の方はまだ一人である。その芸者は、商人の方に心を傾けていたが、武士の方への思いの方も絶つことができないうでいた。最近になって、ついに決心をして、商人の方に嫁ぐことにした。ある晩、その武士と酒を酌み交わし、酔いが廻ってきて寝ようとしていた。その芸者が言うには、「私はあなた様から随分と長い間、御鼻屑を頂きました。このことは一生忘れはしません。私は、長らくほうきを手にして、あなたに妻としてお仕えする気持ちでおりました。しかし、私の母は許してくれません。母は、商人の家に生まれ育ったもので、武士と親戚になることは望まないのです。しかもあなたは、御国の方に奥様がございます。たとえ私に駆け落ちをさせて、願いがかなったところで、結局はうまく行かず、簪が真ん中から折れるようなことになってしまふでしょう。これはかえってあなたに迷惑をかけるだけです。ある商人が、以前からずっと私を可愛がってくれています。私を常に呼んで下さるので酒を勧めております。彼は未だかつて一度も、私を床に誘うような嫌らしいことはしてはおりません。最近、人を通じて、母に私を娶りたいと頼んで来ました。母も承諾してまずし、私も断るわけにはまゐりません。私は、あなたに一言断らないで、このまま去つて行くのに忍びません。そこで今ありのままを申し上げるのです。あなたを騙すようなことはしたくはないからです。どうか、あなた、快く一杯の杯を飲み干して、快く一晩眠つて、永久の別れを致しましょう。もしあなたが遊ぶ時に相手がいなことを心配なさるのなら、幸いに新しく御披露目したばかりの芸者がおります。艶かしくて、可愛い子です。私は、あなたのために仲に入って、あなたの恩情に報いたく思います。あなたのお気持ちは、いかがでしょうかと。」

その武士は、むっとして顔色を変えて言った、「お前は、以前私と誓つたではないか。(白居易の『長恨歌』にあるように)天にあつては比翼の鳥となり、地にあつては連理の枝となろうと。私をまた刀を打ち合わせて誓いをして、その誓紙を神に献じたではないか。今、お前はその誓いに背いて嘘をついて、私を捨てて情夫の所に嫁そうとしている。私はどうして黙つてお前を手放すのに我慢ができません。もし私の心が納得したとしても、この二本の刀が納得するものか。その神が納得するものか。お前がもし本当に嫁そうとするなら、私にもまた心づもりがある。私の藩には精兵が十大隊いる。私はそれを指揮してお前の家に迫つてやる。どうだ」と。

その芸者が言うには、「あなたもまた無理なことをおっしゃる。私は、今身を持って生活しております。私は売り、あなたは買うのです。要するに売物買物、私はただあなたの命に従っているだけです。私は、一旦芸者から足を洗えば、身分は低くても一家の娘です。成人の式をして簪をさして一人前の女として振る舞うのも勝手、嫁ぐのも勝手です。自由勝手、あなたと何の関係がありません。たとえあなたの藩に兵が何十隊ありましようとも、私を一体どうしようというのでしょうか。そもそも各藩が兵を養っているのは、大少参事などの役人達が私的事情を成就させ、私的威力を張るために用いるためでしょうか。もし兵がやってきて私に迫つたならば、私は一走りしてこのことを役所に訴えたいと思ひます。あなたの藩がいかに大きくても、あなたの兵がいかに強くても、どうして天皇家に抵抗することが出来ましようぞ。官軍の錦の御旗がひとたび振られれば、あなたの方はすぐに潰されてしまふことではなう」と。大いに笑つて、階段を下りて出て行つてしまつた。



※

俗曲に、「吹けよ川風、揚がれよ簾、中のお客の顔見たや」とある。夏の真つ盛りの日、赤い太陽がまさに傾きかけようとしている。川の水の色はますます緑深く、南海の沖から、一陣の風がさつと吹いてくる。遊びの舟が何百艘、隊列をなすようにして、両国の墨田川の沖に向かつてまっしぐらに進んで行く。青々とした簾は、清らかな涼しい風に翻っている。黄金の三味線は空に響きわたり、紅のうすぎぬは波に映えている。人の精神を爽快にさせ気を蘇らせる。あたかも焦熱地獄から清涼な世界へ入ったような想いにさせる。思い起こしてみるに、昔の舟遊びの際の決まりに、武士の舟は障子が許されて、町人の舟は簾をつけるとある。しかしこの頃ではこの決まりは崩れてしまい。どの舟も、みな簾を止めてしまつて、障子になっている。雪の降る朝に暖かさが籠もるようにして、風の吹く夕べに男女の情事を忍ぶには、都合がよいようではあるけれども、青々とした簾が、清らかな涼しい風に翻っている爽快さは、また得ることが出来ない。

昨年、故（もと）柳橋の前に一艘の大きな船を浮かべて、碇を降ろして動かずにいた。中に棧敷を設けて、船の中で料理を出していた。あたかも小さな酒楼のようであった。舟遊びの客はみな自分の乗ってきた舟を繋いであがつて、酒や肴を注文した。酒もいければ、料理も旨い。その舟は、「柳船」という扁額（横額）を掲げていた。「柳船」の名は、一時江戸中で有名であった。しかし舟遊びの需要というものは、暑い季節には甚だ盛んであるが、寒い季節は閑散としている。秋風が吹いて来るとともに、「柳船」も止めてしまった。昔、中国で軒轅氏（黄帝）が船と楫を作ったとき、「渙」（『易』の卦、䷺）から思いついたということである。この頃では人が舟を作るのは、思いつくところのものは、一つではない。これを花から思いつき、これを月から思いつき、これを酒食

から思いつき、これを娼婦や芸者から思いつくのである。後に一体どんな新奇の船をこしらえて、遊びに供しようというのか。私は今日予め占つてみることは出来ないのである。

※

一人の客が、座つては横になり、横になつては座つてと、待ちくたびれていた。灯火が消えかけては、また明るくなり、酒の味も酸っぱくもありまた苦くもあつた。一人自分の影を悲しんで、悶々として楽しまなかつた。女中がやってきて、慰めていうには、「今日は、休日なので、どの酒楼も賑やかで、芸者衆はみな忙しいのです。しかし、夜回りの拍子木が五つ（午後八時頃）を打ちました。思いますに、御鼻厘の芸者もやがて帰ってくるでしょう。どうか今しばらくお待ち下さい」と。客が言うには、「もう随分と待ちました。肩が凝つてしまいました。お前、どうか按摩さんを呼んで下さい」と。その女中は、受け合つて出て行つた。すぐに、一人の盲人が二階にやつてきた。客が言うには、「私は、ここに居ますよ」と。その盲人は、客の背中の方に座つて、ボクボクと肩を叩いて、柔らかく腕を揉んだ。その盲人が言うには、「筋が凝つていますね。きつと季節（の変わり目）に感じたのでしょうか。ゆつくりと凝りを解していけば大丈夫です」と。

客が言うには、「按摩さん、この頃何か新しい話はありませんか」と。盲人が言うには、「何もありません。江戸もだいたいぶん衰えてきましたよ」と。客が言うには、「どうしてそれが分かるのか」と。盲人が言うには、「世間の人は皆言っています、衰えも行くところまで行つたと。しかし私の目はその衰えを見ることは出来ません。しかし私も、あることからその衰えたのが分かります」と。客が言うには、「何からそれが分かる

のか」と。盲人が言うには、「私は、日々出歩いてこの手一つで商売を致しております。家に帰るといつも、下駄の臭いを嗅いでおります。すると必ず糞の臭いがしますので、その下駄の歯を洗っております。この頃は、下駄の歯を嗅いでも、臭いがることは殆どありません。思うに街中に犬の糞が少なくなったのでしよう。犬の数も減ったのなら、人の数も減ったのだということが分かります。これが「衰」と言わずに何と言われましよう」と。客が言うには、「なるほど、なるほど」と。

その盲人が言うには、「この頃この地におきまして、猫の数【原注】江戸の俗語で、ふざけて芸者を称して「猫」と言っている。三味線は、皆猫の皮を用いるからである」は、日々に増えております。これは犬が減ったからでありましようか。私の家では、四方皆猫の巣になっております。「一つ長屋の左次平さんが、四国を巡って猿となる」と数え唄にございますが、このごろでは。町内の娘さんは、いながらにして猫になります。何とその変わり身の術の早いこと。思いますに、旦那様は猫の方は好きでしよう。この頃猫の値がとて高く、一匹を買うのに、必ず一円はかかるそうですね。諺に「猫に円金（小判）」とあるのは、本当のことでございますね。今日、猫がやたらにいるのは、驚くほどです。小猫（小妓）はさておき、大猫（大妓）だけを数えても、百五十人もいます。試しに、一人一日、一円に相当するとしてこれを計算してみると、一月の金額は、四千五百円になります。何と盛んなことでしょうか。私の師匠の赤西検校が、遺訓を遺しています。「神仏の道は信じてはならない。衣食については旨いもの綺麗なものを選んではならない。親戚については互いに愛情を抱いてはいけない。朋友と親しく交わってはいけない。早く起きて夜は早く寝て、爪に火をともし、金勘定せよ。ただ（金貸しをして）利子をむさばれば、一生安楽に暮らすことが出来る」と。これは名言です。しかし、私どもは偉くはありませんので、この遺

訓を守ることができず、今に至ってまで、非常に貧乏で、半文銭も蓄えることはできないでおります。人であるのに猫にも及びません。いつも隣の猫どもが食っている鰻の臭いを嗅いで飯を食っているのです」と。と、その時すぐに、女中が階下から、「参りました」と知らせしてくれるのが聞こえた。その盲人は慌てて言った、「猫のお話しは、ここまでにしまししよう。筋の方もだいぶん解れてきました。早くお休みになった方がよろしいでしよう」と。

※

二人の若い者が、全身に竜の刺青をして、三尺帯を締めていて、通常一般の帯は締めていない。両国橋の上に立って、欄干によりかかって橋の下を見おろしている。橋の下では、遊びの舟が集まって、三味線や笛を涼しげな風の中で演奏して、杯盤を清らかな潮で洗っている。まことにここは唄を唄い笛を吹く遊興の海である。甲が、乙に向かって言うには、「畜生め、どこのけだもの達だ、うるさくてたまったものではない。最近では芸者が随分とはやっているが、二本差しの武士どもが芸者が非常に好きだからに他ならない。この土地の小使臭い子守芸者達も、このごろは皆奢り高ぶってしまった、奥様・お嬢様と変わらない。ややもすれば人を人とも思わない素振りだ。これは世間で言う、「芸者芸者と口では言うが、家へ帰ればお嬢さん」ということだ。聞いてあされるばかりだ。つまりが、「猫じゃ猫じゃと、おっしゃいますな、絞りの浴衣も、（客が）くれたもの」ということだ。たいそうなのろけ話しということよ」と。乙が言うには、「そんな話は相手にするな。このごろ、芸者達で、（多額の）金銭を手にする者が多い。だから、奢りの気風が、生まれてしまつて、縮れ毛の髪に、妄りやたらと金無垢の簪を挿している。もつ

たいないことよ、もったいないことよ。今にスリにあって（簪を）抜き取られて、泣きつづらをするだろう。と言ったつてあの顔じゃあ蜂だつて刺すまいぞ。ざまあ見やがれ」と。甲が言うには、「イヤイヤそんなもんじゃないよ。あの芸者達はけちだから、夜（座敷から）帰ってくるよ、必ず簪を髪から抜いて、札に巻き挟んで懐に入れてる。なんて悪賢いんだろう」と。乙が言うには、「お前は聞いて知ってるだろう。去年、芸者の房八婆さんが、書画会を中村楼（や）で開いたことを。その日は、諸先生も皆行ったということだ。お客が多く、お祝儀がおびただしく多いのは、このごろ例のないことだった。人は皆その会のことを滅法会（滅法界（とんでもないこと）とを掛けた）と言っている。何とも妙なことだ。わたしは、よくあいつの家に行くのだが、未だかつて彼女が墨をすって筆を嘗めて、漢字をなぞっているのさえ見たことがない。それなのに書画会の先生になっている。本当に不思議なことよ。芸者で書画の先生となった者は、古今、滅多にないことである。これから、ひよつとして芸者で役人になる者も、世間に出てくるかも知れないことは、推測もできないことよ」と。お互い顔を見合わせて笑った。たちまち「おまわり」が、隊列を組み銃を担いで、掛声を掛けてやってくるのが見えた。二人は慌てて橋を下りて逃げて行った。

※

唐の大宝年間には大奥に三千人の女性がいて、美人でない者は一人としていかなかった。それなのに玄宗皇帝はただ楊貴妃だけに恋愛としていたのはどうしてであろうか。思うに国を傾けるほどの絶世の美女は、篤く徳があつて特別の才能のある人物と同様で、一生の間でそう何人もと出会うことがあるか。私は、この十年間で知り合った柳橋の芸者を思

い出して考えてみるに、その色と芸とは皆似たり寄つたりで、まだ一人のこれはといった佳人、ちよつと微笑めばあらゆる美しさが生まれ、他の多くの化粧した女性達の顔色を失わせるような者は見たことはない。しかし、強いてこれを柳橋の芸者の中から捜してみると、一人いる。その名を阿清（おきよ）という。生まれついで美人で、物静かで言葉数も少ない。彼女を見るに光り輝く宝玉のよう、彼女に接すると暖かい春風のような。私は最初彼女を吾が友人永井芳山の家で見た。年は十五。私は次のような詩を作った。

若々しい桃の花びらの上に、音もなくしつとりと露が下りた。

仙女の家は深く戸を閉ざして、夢の中にいてまだ目を覚ましていない。

何時の日か、劉郎のような美男子が尋ねて来たならば、

紅い唇を少しほころばせて、始めて迎え入れてくれることであろう。

阿清の名は、一時この花街を風靡した。しかし常に病気がちで苦しんでいた。文久二（一八六二）年の秋に、麻疹が流行して、阿清もまたこれにかかつて数十日、床に臥して、ついに再び起つことはなかった。年は僅かに十七歳。永井芳山が、彼女を弔う詩を作った。

お前のような国一番の美人に、今までもこれからも、

出会うことはまづなからう。

（お前の死を聞いて）色々な思いが心に湧いて、  
涙も尽き果て、（代わりに）血の涙が、衣を濡らしている。

夕日の射す中、私は弔っている、

寂しげなお前の墓の傍らで。

枯れかかった野菊の花が、僅かに香りを残しているが、

（その花に）弱々しげな蝶が飛んで来ている。

私は、その詩の韻を踏んで、別に彼女を哭する詩を作った。

昔の思い出を、話そうとしたところで、  
今では聴いてくれる人も殆どいなくなった。

涙は滴り落ちる、あのころ、

お前が身につけて舞ったあの衣に。

試しに聞いてみたい、(仙人になって月に昇った) 嫦娥のようなお

前よ、

お前は一体どこへ行ってしまったのかと。

夢を見ているかのような私の魂は、永久に、

(あの嫦娥のいるという) 月に向かって飛んで行くことよ。

永井芳山もその次の月に亡くなってしまった。ああ、才子・佳人には、

天はこれに寿命を与えないことであるよ。まことに痛み悲しむべきこと  
であるよ。このごろでは、年輩の芸者では、(これはといったのは) た

だ阿園だけである。阿園は、若いときは、阿栄と並び立っていた。二人  
の美人の名は、長い間、両国での双壁であった。かつては、柳橋での芸  
者の気風は、新橋や金春(こんぱる)などの地とは大いに異なっていたは  
なかった。しかし、このごろでは服装や唄う調子も一変して、清らかさ  
気高さ幽玄・優雅な風をたつとんでいて、その趣が他の地と異なってい  
るのは、考えてみるにこの二人から始まっている。阿園は色・芸ともに  
言うところがなく、さらに年を経てからは、ことさら自ら遜って、客に  
向かって奢り高ぶる様子を見せず、また後輩の者を引き立てた。それで  
人々は阿園を賢い女であるとした。芸者の中の君子というにふさわしい。

後輩達の中にあつて、名声が際だつて高い者とは言えば、阿鳥を第一  
に推賞できる。阿鳥は、その才を中に秘めてはいるが、外に對しての行  
いは角のあるところがない。親に仕えるに当たっては、孝順である。人  
に交わるに当たっては、穏やかである。未だかつて怒りを声や素振りに  
見せたことがない。これまた立派な芸者である。しかし、阿園は去年の

十二月に身請けされ、阿鳥も今年の春に良縁に恵まれた。いま誰が、多  
くの芸者達の最たる者であるのか分らない。私はまだ人々の一致した  
見解を見いだすことができずにいるのである。私は竹内玄洞(蘭方医)  
と故(もと)柳橋のある酒楼で飲んで、次の詩をその壁に書き付けた。

艶かしい歌は、酒の興をいやが上にも勧め、

秋たけなわの候、酒に酔う。

果てしない喜びの気持ちに浸った後は、

かえって憂いの気持ちに湧いてくる。

門前の柳は(散り落ちたのか)寂しく疎らになつていて、

美人(の芸者達は)は、もういなくなつてしまった。

後になつてきつと思ひ起こすことであろう、

この酒楼において楽しんだことを。

今から僅かに七・八年前のこと、竹内玄洞は老病の身で、北の地へ流  
れて行き、そのころの芸者達は皆かつての面影もなく、あたかも明け方  
の星のようである。私も余生をこの俗世間の中に託している。故柳橋を  
通るたびに、仰いでその柳の古木を見て、悲しい気持ちで昔を思い起こ  
して、晋の桓温が金城の柳の成長に時の流れを感じたという話があるが、  
それと同様の感慨を持つ。ああ、ここで遊ぶ人は多いが、私と同じ感慨  
を持つ者がいるだろうか、私と同じ感慨を持つ者がいるだろうか。

※

両国は繁華の地、柳橋は花柳の街であり、文人・墨客達は、多くはこ  
の地を俗な場所として見ていた。しかし、空が澄み渡った夜ふけに、家々  
で人が寝静まったころ、舟を川の沖に浮かべて、南に河口を望み、北に  
墨田川の流れを眺めれば、明るく冴えた月が波の上に射して、金の竜が

走り抜けるかのようにあり、涼しげな風が衣を吹いて、仙人が空翔けようとするかのようにある。漁火が幾つか、緑の草が生える中州の彼方に消えたり点ったりしている。酒の席に灯された一つの灯は、画のように美しい酒樓の簾の中に薄暗く見える。この土地は、やはり華やかであつて決して俗な場所ではない。この情景は、幽玄であつて決してすさまじいものではない。まことにここは三都の中でも第一番の風流の地である。まして酒は旨く肴は新鮮で、美人麗人が三味線を弾き舞を舞つて、風が翻るように緩やかにめぐつて、人の精神をほぐし気持ち伸びやかにさせ、胸の中の様々の憂いを洗い流してくれるのである。

白居易や杜牧たちをもしこの地で遊ばせたとしたならば、必ずや長歌を作つたり新詞を作つて、柳橋の美しさを誉め、そのすばらしさを歌いあげてくれたであろう。柳橋を俗な場所と見る世間の者は、そのうわべだけを見て、真の境地を認めようとしないのである。私は以前西國の地の雑詩を数篇作つたことがある。今はその中の二つを記して、(この地の素晴らしさを示す) 証拠としたいのである。

三味線や歌は、一体幾人の人を、悩殺したであろうか。

この地の繁華といつたら、世に比類がない。

簾が、楼にめぐらされていて、霞がおぼろにかかっている。

舟の櫓の音が、透き通つた水の中、岸に近づいてくる。

梅が紗の袖に匂いを移す、酒樓梅川の夕べ。

柳が三味線に映えている、酒樓柳屋の春。

大妓・小妓が装いも新たに、艶かしさを競い合っている。

風流の遊びについて、李十娘に学ぼうとしない者がいるであろうか。

(中国の) あの秦淮の山水の地で、遊んだことはないけれども、その情景の素晴らしさも、きつとこの地両国には負けることである

うよ。

明きらかな月は、才子達の宴席を、ずっと照らし続けており、清らかな風は、美人達を乗せている舟に、常に満ち溢れている。空を勢いよく駆ける花火は、天の川を揺り動かし、

酒樓の欄干に寄りかかる(白い)浴衣姿は、白いかもめと照り合っている。

この際、蘇東坡が愁いを払うために飲んだあの酒を頼んで、今お前と楽しく飲むために、この十年の間の愁いを掃き捨てようではないか。

※

私は以前に桂川甫周・柳川春三達と、よく両国に集まって酒を飲んだ。そのころ見たことのある女の子達は、年は皆十歳前後で、まだ眉毛を画くことも知らず、水漬を垂らして、人形を抱いて、チヨロチヨロと遊んでいた者達であつたが、今では一人前になって、紅い着物を着て立派な三味線を弾いている。その立居振舞はさまになっていて、その唄や演奏は充分に鑑賞にたえるのである。私は、そのため傷み悲しい気持ちがある。「学業は努力を続ければ精密になっていくが、遊んでいると荒(すさ)んでしまう」と、唐の韓愈が、一千年も前に言っている。思うに芸者は身分の卑しい女であり、唄や三味線は取るに足らない技である。しかし、努力してこれを学んで身につければ、わずか数年で我が身を養つていくに充分である。

今、国の政治を執っている者は、高い爵位を賜り、充分な俸禄をもらつていて、輝くほどの権勢があつて、溢れるばかりの威力があるのに、教育文化が国に確立されず、政府の恩徳が人々に行き渡らないのは何故で

あろうか。これはその地位にある人が「ほんくら」で、その職務に堪えないからではない。人々は、太平の世を楽しんで、一日の安楽をむさぼろうとしてゐるが、賢人や能力のある人を登用することを急ぐあまり、かえつて媚び諂つたり、節操のない人を採用することになってしまうのである。これはほかでもない、よい政治を行おうと努力せず、「放擲」

(投げやり)の風潮が蔓延つてゐるからではないか。徳川幕府の末期において、才能のある人や見識の優れた人がいなくなつたわけではない。しかし、政治や教化が廢れて振るわなくなつたのは、「放擲」の二字のせいである。今も昔も政治を執る者で、努力して成功し、「放擲」のために身を持ち崩さなかつた者はいないのである。「放」にせよ「擲」にせよ、明治政府の高官達よ、これを戒めるがよい。という私も自分の心を「放し」(勝手気ままにし)、生業を「擲」する(ほつたらかす)者である。今にそのうち道で乞食でもしていることにならう。(こうなつたら)私は、芸者のように身分の卑しいとされる女に対しても、顔向けが出来ないやうになつてしまふよ。

※

私がこの編を書いているとき、一人の客がこれを盗み読んで、顔をしめかめ眉を顰めて言つた、「あなたの書は世の教育に全く益がなく、徒に人を罵つてゐる。無用の文を作つて、世の怒りに触れてゐる。あなたは、何のためにこのような狂気じみた愚かなことをするのだ。あなたは、後悔の気持ちを持つてゐないのか」と。

私は笑つて言つた、「私はもともと無用の人である。どうして有用なことをする暇などあろうか。しかも私が罵つてゐるのは、みな世間の(男女間の)風流を好むことからくる罪過なのである。しかし私が人を罵る

のも、私が風流を好むことからくる罪過なのである。世の人が風流への怒りの気持ちから、私の風流の文章に対して罪があるとすれば、私は甘んじてその罪に服すことにしよう。何も言い訳はしまし。しかし、世の人で風流の罪を犯さない者がいようか。所詮、大びらにするのと、秘かに隠れてするのの違いだけなのだが。もし一人のお堅い道学先生がいたとして、『論語』にあるように) 殷の車に乗つて、周の冠をつけ、さらに右では『唐典』(唐代の官制を記した書)を調べ、左では『明律』(明代の刑法書)を調べて、小難しいことを言つて、私の風流の罪過を責めたならば、私はそれに答えて、「あなたは道学を講じてゐるが、私は風流を好んでゐる。これには半文の貸し借りもないではないか。あなたが私のことに口を出そうとは、思いもよらない。どういふことなんだ」と言おうと思う。すると彼がもし、「お前が書いた文章はよくない。読む者は意味を理解できない。拙者はそれが心配だ。書いてゐることは嘘ばかりで、信のことがない。拙者はそこが疑問に思う」と言つたならば、私はまた答えて、「私の文章が巧くないのは、無学であるからである。その点については御批判を頂きましょう。もし書いてあることが本当でないというなら、あなたは柳橋に行つて確かめてみて下さい」と言おうと思う。私には恐れるものなど何があるやう。かつて寺門静軒翁が、『江戸繁昌記』を著した。当時の幕府の役人達は、幕府を誹謗してゐる言葉に対して怒つて、静軒翁を牢獄に繋いで、その本を焼いて、その罪を喧伝して、ついに彼を追放した。世間では、役人達の器量が狭いことだと言つて笑つてゐるし、静軒翁の書も今でも出回つてゐる。あなたも御存知であろう。ヨーロッパの諸国で出している新聞は、多くは誹謗の語や罵詈雑言の類であるが、君主は罪することはしないし、役人もとがめだつたりはしない。君子も怒つたりしないし、小人であつても恨んだりはしない。皆争つてその新聞を読んで、見聞を広めて、用心し戒めるので

ある。私の本などは、その新聞紙のようなもので役に立たないものである。あなたは心配のし過ぎではないのかね」と。その客は黙って帰り、「馬鹿につける薬はないよ」と言つて戸を出ていった。

## 柳橋新誌第二編 尾

### 後序

今年の夏、私は偶然にもある職務のために東京にいた。ある日、友人がやってきて何有仙史（成島柳北）が著した柳橋新誌二編を見せてくれた。そして言うには、「柳橋の十年前の有り様については、初編で既に書き尽くしている。しかし、今ではもう、はやりすたりの場所が変わつたところがある。そこで第二編でその変化の様を記したのだ。この本を読んでその事情を知るがよい」と。そこで私は喜んで一読してみた。

その筆力は自由奔放、文章は秀逸である。さらにユーモアのある論をまじえて、今の人情を写し出している。もし晋の楽広・潘岳らの仲間がこの書を読ませたならば、必ずや筆・硯を捨てて、世俗の中に身を引つ込めて、目を見張つてあきれる事であろう。私は仙史とは旧友である。私は彼の人となりはよく知つてゐる。しかし、この本を読んでもみると、彼は色にひたつた放蕩児のようであり、花街に溺れてしまった遊び人のようである。しかし、仙史は（『莊子』逍遙遊篇の大鵬にたとえるならば）幼い頃より奥儒者の巢（家）に育ち、文学を餌（かて）としてきた。朝には韓退之や柳宗元の境地を翔け巡り、暮には歐陽修や蘇軾のねぐらに棲むのである。（仙史は『莊子』の大鵬のように）既に翼を九万里の彼方に飛翔させた者である。この本などは、彼にしてみれば大鵬の一枚の羽のようなものであり、鸞鷲（鳳凰の類）のやはり一枚の羽のようなも

のであろう。

一方私はといえば、生まれつき身体が弱く、さらに厳しい父親の戒めもあって、足を街中に入れることがなかった。まして繁華の地については、耳でその様子を聴くだけであつた。今、仙史の書で、その概略を知ることが出来た。これは大鵬や鸞鷲の羽を借りて、遊び眺めるといふことではないか。仙史はかつて幕府の壁に、「千年の昔にも、衛の苟変が人民から二個ずつの卵をとりたてたという僅かなことで職を追われたことがある」と書いたことがある。その憤慨の様子は、想像することが出来る。そこでさつと進む道を換えて、このような諧謔の書を著して、自ら満足していた。孫臏は足を切られて兵法を説き、司馬遷が牢獄に繋がれて『史記』を著したようなものであろうか。ここで仙史の心に感心して、つまらないわごとを書いてゐるものは誰か。それは私、東鄙の狂生、桂閣子である。

明治四年芒種（節季の一つ陰曆五月）の後の八日。

江東の竜涎窩にて記す。

時に芍薬の花が盛んに咲き乱れ、

その香りを含んだ風が簾に充ち溢れている。

清泉白山山人筠（不明）書す。

『柳橋新誌二編』 訳

Translation of “Ryukyo-Shinshi Part 2”

佐藤 明  
Akira Sato